



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10) 平成27年度:16.

入院して計画手術を受けた子どもの思い

森 浩美, 飯崎 あずさ, 佐々木 俊子, 岡田 洋子

入院して計画手術を受けた子どもの思い

森 浩美¹、飯崎あずさ²、佐々木俊子³、岡田 洋子⁴

¹旭川医科大学、²旭川医科大学病院、³名寄市立大学、⁴旭川医科大学

【目的】

入院や手術は子どもにとって非日常的な体験であるため、看護師は子どもの思いを十分に理解した看護師の支援が重要となる。本研究の目的は、子ども自身への調査により、入院して計画手術を受けた子どもの思いを明らかにすることである。

【方法】

1. 研究対象者

対象は入院して計画手術を受けた小・中学生であり、認知・理解力が年齢相応で手術後の経過が順調な者とした。但し、悪性腫瘍や手術後遺症が残ると予測される場合は対象外とした。

2. データ収集方法とデータ収集期間

子どもが入院する病棟の看護師が対象者を選出し、子どもと親に研究の説明を行った。次に、同意した子どもと親、看護師で面接の日程を決め、その後、研究者は紹介を受けた。

面接は自作の質問紙を用いた構成面接である。研究者が質問内容を読み上げ、子どもが口頭で回答した内容を書き取った。子どもが答えた内容で理解し難かった部分については、同席した親から補足説明を受けた。また、子どもの中には面接は受けたくないが、質問には答えても良いという場合もあった。その場合は質問紙に回答を記載してもらい、後日回収して分析の対象とした。

主な質問項目は、①入院・手術に関する説明を聞いたときの気持ち、②入院・手術して嬉しかったことや楽しかったこと、③辛かったことや悲しかったこと、④退院が近づいたときの気持ちなどである。

データ収集は2014年7月～10月に行った。

3. 分析方法

面接内容の逐語録を作成し、質問に対する答えを文脈ごとに抽出した。その文脈を並べ何度も読み返し、解釈してコード化した。次に、コードを類似性と相違性に基づいて比較検討し、分類した。分類されたまとまりに相応しい名前をつけて抽象度を上げ、さらに、比較検討を繰り返し、カテゴリーを抽出した。分析の全過程において小児看護学教員2名と臨床看護師1名で分析・結果の妥当性を検討した。

4. 倫理的配慮

研究に先立ち、研究者が所属する機関の倫理委員会と子どもが入院する病棟の看護管理者の承認を得た。また、研究は子どもという未成年者を対象としているため、親の同意は必ず取り、面接にも同席してもらった。そして、研究者は子どもが理解しやすいような話し方をし、子どもの気持ちを確認しながら研究を行った。

【結果】

1. 対象者の概要

男性7名、女性6名の計13名から回答を得た。年齢は6～13歳で平均9.6歳であった。病名は膀胱尿管逆流症、口蓋裂、斜視、口蓋扁桃肥大症などであり、手術回数は1回

目9名、2回目2名、3回目2名、入院期間は3～24日間、平均8.7日間であった。全員が入院前に医師や親から入院して手術することについて説明を受けていた。

面接時間は一人24～50分、平均32分であった。

2. 分析結果

分析の結果、65コードから24サブカテゴリー、8カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〔 〕、コードを〈 〉で表す。

子どもは「手術すると聞いて驚いた」「入院・手術するのは嫌だった」など、入院や手術は【できることならしたくなかった】と思っていた。しかし、〔心の準備ができる〕〔手術について理解できる〕ため、説明を受けたことについては【教えてもらって良かった】と捉え、〔治すために手術する〕〔学校のことは友人に任せる〕など【覚悟して臨む】様子を語っていた。

入院後は〔入院生活になじめない〕〔家族に会えなくて寂しい〕など【入院生活は不自由】と感じ、〈痛くて普段通りの生活ができない〉〈目が覚めたらクダが入っていて驚いた〕と【手術に関連した心身の苦痛】も体験していた。その一方、〈家族や友人の面会は嬉しい〉と〔人の優しさが嬉しい〕という思いや〈遊べて楽しかった〉〈自分の時間ができた〉と〔入院生活にも楽しみがあった〕ため、【入院生活の心とむひととき】を送っていた。そして、退院が近づいても〔手術したことの良さを実感できない〕思いや〔退院前の気がかり〕があるため、【退院を手放しで喜べない】と思ひもありつつ、〔家族に会える〕〔終わって良かった〕〔自分は頑張った〕と感じ、【退院できて嬉しい】という思いにもなっていた。

【考察】

今回の子どもは全員が入院前に医師や親から入院・手術に関する説明を受けていた。そして、殆どの子どもが〔心の準備ができる〕〔手術について理解できる〕ため【教えてもらって良かった】と思っており、子どもに対する説明の重要性が再確認できた。そのような中、〈目が覚めたらクダが入っていて驚いた〉のように想像とは違う体験をする子どももいた。想定外の出来事は、子どもが心的混乱を引き起こす要因となり易い。そのため、学童期の子どもには可能な限り、実物を見せたり体験させたりして、具体的に理解できるように説明する必要がある。

また、子どもは退院が近づいても〔手術したことの良さを実感できない〕思いや〔退院前の気がかり〕があるため、【退院を手放しで喜べない】と思っていた。手術の効果が実感できなかったり、不安を抱いたままの退院になったりすると、入院・手術は辛いだけの体験となってしまう可能性がある。そのため、看護師は退院前に子どもの思いを聞く時間を十分につくり、子どもが不安や心配事を解決し、頑張った自分を自覚できるようにすることが重要と考える。

本研究は公益財団法人ユニバーサル財団の研究助成を受けて実施した。